常葉大学造形学部
紀要　第14号・2016
土屋和男、黒瀬武史
TSUCHIYA Kazuo,KUROSE Takefumi
2015年11月19日 受理

歴史的建造物を有する街区における社会実験を通した環境デザイン教育

An Environmental Design Education through a Social Experiment in a District with Historic Architectures

キーワード：
環境デザイン教育
歴史的建造物
社会実験
日の出埠頭
清水

清水港日の出地区に、昭和10年代に建てられた、木造石張りの倉庫群がある。筆者らは、これを建築史・都市形成史的に見て、地域資源ととらえ、2012年以来年１回、前面道路の占用許可を取り、賑わい創出の社会実験「ミナトブンカサイ」を行ってきた。この試みを通して明らかになってきた造形分野、特に環境デザインにおけるPBLを実践する意義と問題点等について述べる。

1．はじめに

清水港日の出地区に、昭和10年代に建てられた、木造石張りの倉庫群がある。約150mにわたって20棟あり、道の両側に繰り返される三角屋根は、港町を象徴する独特の景観である。筆者らは、これを建築史・都市形成史的に見て、地域資源ととらえ、2012年以来年1回、前面道路の占用許可を取り、賑わい創出の社会実験「ミナトブンカサイ」を行ってきた。この場所ならではの、さまざまなアートや音楽イベントを企画し、学生と教員が実践発表の場を創出することで、自治体、企業、地元住民との交流を行い、地域連携を行うことを目的としたプロジェクトである。

本稿では当該倉庫群の建築史的価値を概観した上で、「ミナトブンカサイ」での4年間の経過を、特に常葉大学[1)]造形学部の学生の関わりから報告し、この試みを通して明らかになってきた造形分野、特に環境デザインにおけるPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）を実践する意義と問題点等について述べる。

2．街区の変遷

日の出埠頭倉庫群は、静岡市清水区日の出町３丁目および６丁目に存在する切妻屋根の倉庫を総称するものである。３丁目と６丁目を隔てる道路沿いに倉庫が並んでいる。

現在の日の出埠頭は1921（大正10）年から1938（昭和13）年の間に行われた清水港第二次修築工事により建設されたもので、倉庫群の一部もこの時期に建設された。当時は専売制度下にあった台湾産の砂糖を保管する保税倉庫として利用され、物流の中心的存在だった。

1960年代から増加する貨物量に対応するためコンテナ埠頭の整備が進行し、清水港の主要な物流機能は日の出埠頭からコンテナ埠頭の興津埠頭、袖師埠頭に移っていった。同時に、荷役の機械化により日の出埠頭の港湾労働者が減少したため、周辺の商店街や地域と港の関係も希薄になっていった。当該倉庫群は2014年度をもって、倉庫としては事実上休止している。現在でも周辺には倉庫群は物流倉庫が建ち並び、稼働しているが、日の出埠頭の清水港全体における地位は相対的に低下傾向にある。

一方、1988年に日の出埠頭の北部では再開発が行われ、エスパルスドリームプラザやマリンパークが整備された。倉庫群のある一帯はマリンロードにより市街地と分断され市民があまり訪れることのない場所となっているが、賑わいの拠点と中心市街地への近接性があり、港湾再生の起点となるポテンシャルを持ち合わせている。さらに近年は、日の出埠頭に大型客船誘致を積極的に行っており、外国人観光客の増加とともにインバウンド需要の拠点となる可能性も備えている。

3．日の出埠頭倉庫群の建築史的価値

日の出埠頭倉庫群は、木骨石張り、平屋建て、切妻瓦葺きである。これらは昭和8年頃から昭和20年代にかけて逐次的に建設されたと見られる。2015年現在、内部は公開されていないので、ここでは景観に反映する外観的要素を中心に、その建築史的価値について述べる。

構造　この倉庫群は、しばしば「石造倉庫」と呼ばれるが、建築構造的には鉄筋コンクリート造の基礎の上に、木造の骨組みをつくり、その外側に切石を張ったものであり、基本構造は木造である。しかし、石が張られることによって横方向のひずみを止めているから、石も補助的な構造材として働いていると考えられる。現在は表面にモルタルが塗られているので、石はモルタルの破断箇所から部分的に見えるにすぎないが、内部では石の面がそのまま露出している棟もある。

隣接する棟では、内部で２棟がつながっているものがあるほか、仕切りのある場合でも柱を共有しており、構造的には一体である。全体的に、数棟が連続してひとつの構造体をなしていると思われる。

小屋組（屋根の骨組み）はキングポストトラス（三角形の組み合わせで構成される、西洋から導入された構造）を等間隔で並べることにより小屋組の一体性が計られ、これによって、細く少ない木柱で９m前後の大スパンを可

1) 常葉大学は 2013 年 4 月に常葉学園大学から名称変更しているが、本稿では便宜上それ以前のことについても常葉大学とする。

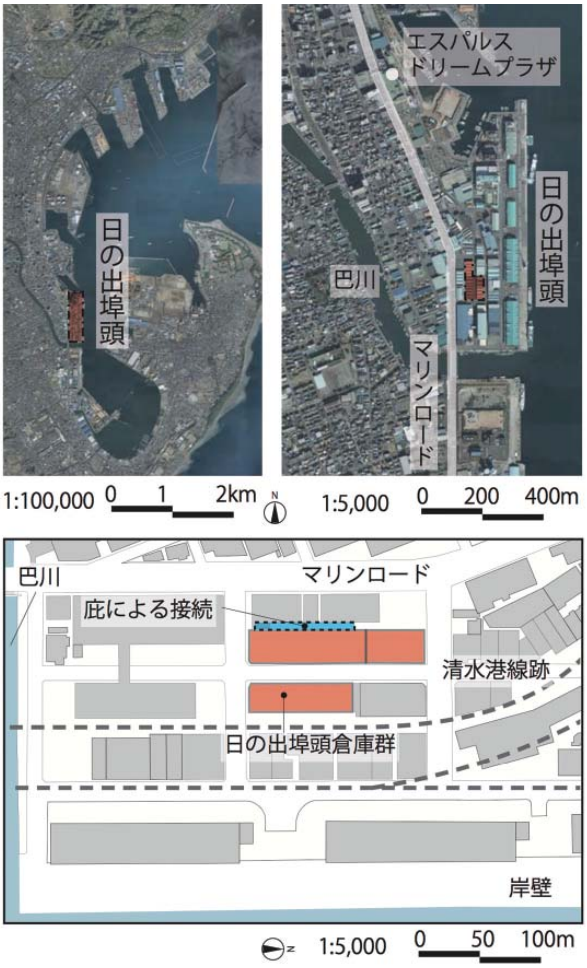

図 1　日の出埠頭倉庫群の位置

図 2　日の出埠頭倉庫群の景観

図 3　倉庫稼働時の様子（2012 年）

図 4　2012 年「ミナトブンカサイ」路面アート

図 5　2012 年「ミナトブンカサイ」造形ワークショップ

図 6　2012 年「ミナトブンカサイ」ライトアップ

図 7　2013 年「ミナトブンカサイ」「ブルーキャンバス」準備（常葉大学内）

能にしている。接合にはボルトやプレートなどの金物が使われている。このトラスの形が三角屋根の外観に反映されているが、外観からは勾配も等しく同じように見えるものも、小屋組は棟によってやや異なっており、これらは建設時期の違いによるものと思われる。

材料と仕上　この倉庫群で注目すべき材料は、やはり石である。凝灰岩の切石で、おそらく伊豆から運ばれてきたものと思われる。この石を木骨に張る蔵は、幕末から明治期を中心に、駿河湾、遠州灘の沿岸および河川流域に相当数がつくられたと見られるが（2012年に静岡県建築士会西部ブロックによって行われた調査では、浜松、磐田地域に約130棟の現存が確認されている）、日の出埠頭の倉庫群は、中でも最大の事例と考えられる。

外装材に凝灰岩を用いるのは、防火性能を期待してのことであるが、平瓦やしっくいを用いる土蔵に比べ、工程が少ないので速くでき、同形の規格材を用いるので大面積の施工も容易であることが利点であろう。いわば骨組みにパネルを張るのと同じ工法である。日の出埠頭の倉庫群は、石張りの蔵としては遅い時期に属するが、上記の利点ゆえにこの材料と仕上が採用されたと推測される。観察すると、出入口や破風（屋根下の三角形の部分）の開口部廻りには、凝灰岩ではあるが質の異なる石が見られる。ここは力学的に重要で、風雨に対しても傷みやすい箇所であるため、やや硬い耐久性の高い材料を用いたと思われる。

機能　日の出埠頭の倉庫群は、港湾機能の近代化に伴って建設された。前面の11m道路に駐車したトラックから、荷を台車ごと引き入れることのできる、幅の広い引き分けの鉄扉を備えている。

内部も近代的な大量物流に対応し、できるだけ障害物となる柱が少なく、室内も高い大空間が設計されている。この大空間を可能にしているのが小屋組のトラスである。この大空間が繰り返されることで、どの棟も同じような使い勝手が得られている。

このような将来を見据えた設計がなされていたことで、これらの倉庫群はその後の変化にも対応し、2014年まで、内部にそのままフォークリフトが乗り入れて荷下ろしを行っていた。きわめて機能に特化した建築物であるにもかかわらず、80年近くの長きにわたってほとんど形を変えることなく使い続けられてきた事実は、当初の計画の先見性を示すものであり、文化財的遺構として貴重である。

4．「ミナトブンカサイ」の経緯

日の出埠頭の街区および倉庫群に着目するに至ったきっかけは、2011年度に東京大学大学院工学研究科都市工学専攻都市デザイン研究室（西村幸夫教授、黒瀬武史助教）が、静岡市都市局都市計画部都市計画課から受託して行った研究にある。これは「平成23年度清水港日の出地区周辺のまちづくりに関する調査研究報告書」としてまとめられたが、ここで当該倉庫群が歴史的資源として特記された。

2012年　当時この研究を中心的に進めてきた東京大学の大学院生（大森文彦）の発案により、普段一般市民が目にすることの少ない倉庫群の景観を知ってもらう、賑わい創出の試みとして、前面道路の占用許可を取り、1日間車両通行止めとし、路上で各種イベントや出店を行う企画が立ち上がった。この企画にともない、地元でその意義を共有することのできる者として、杉山智之、土屋和男が参画し、これに興味、関心をもって関わることのできる人材として常葉大学造形学部の学生有志（代表：山嵜絵莉）が加わることとなった。

企画運営は東京大学の大学院生が中心となって行い、「ミナトブンカサイ」と名付けられ、2012年11月25日（日）、10：00-19：00に実施された。当時、倉庫群は土地が鈴与株式会社、建物が株式会社富士ロジテックの所有であり、建物は現役の倉庫として使用されていた。そのため開催日は休業日時に限定されることとなった。内容の詳細は省略するが項目のみ挙げれば、音楽ステージ、露店・マルシェ、研究展示、造形ワークショップ、路面アート、ライトアップ等であった。このうち常葉大学造形学部が中心となったのは、造形ワークショップ（ランプシェード制作、似顔絵）、路面アート（チョークによる絵）、ライトアップで、後述のスタンプラリーマップ等のビジュアルデザインも行った（制作：鈴木雅人）。開催日は日の出埠頭への「日本丸」の入港に合わせ、JR東海のさわやかウォーキングや、他イベントと連携したスタンプラリー等を行った結果、1500人を超す多数の入場者を迎えることになった。資材の調達等は、静岡市の賑わい創出事業の一部として行うことで、静岡市まちづくり公社と連携して対応した。

2013年　前年よりもやや内容を絞り、「みなと」の雰囲気を味わう、をコンセプトに企画が進んだ。前年同様、企画運営は東京大学の大学院生が中心となって行い、常葉大学は内容の一部を担うことになった。常葉大学造形学部が中心となったのは、立体アート作品展示、「ブルーキャンバス」（ライブペイント）、「アコソコ」（アコースティックライブ）、フラッシュモブ（ダンス）等で、軽音楽部やダンス部に参加してもらうことで関係者となる学生が増加したとともに、環境デザインコースのコアスタッフ（代表：此木駿）はより運営側の位置付けが強くなった。またスタンプラリーパスポート等のビジュアルデザインも担った（制作：鈴木雅人）。

2013年10月20日（日）、10：00から実施されたが、当日の天候はくもりのち雨で、15：00以降の企画は中止となり、フェルケール博物館を会場として、「みなトーク」（トークイベント）を実施した。屋外のイベントであり、雨に対する備えが反省点となった。資材の調達等は、前年同様、静岡市の賑わい創出事業の一部として行うことで、静岡商工会議所と連携して対応した。

なお、このときのトークイベントが発端となって、2014年

図 8　2013 年「ミナトブンカサイ」フラッシュモブ

図 9　2013 年「ミナトブンカサイ」スタンプラリーパスポート（制作：鈴木雅人）

図 10　2014 年「清水みなと散歩デラックス」マップ（制作：鈴木雅人）

図 11　2014 年「ミナトブンカサイ」公開講座

図 12　2014 年「ミナトブンカサイ」フラッシュモブ

図 13　2014 年「ミナトブンカサイ」「アコソコ」とライトアップ

図 14　2014 年「ミナトブンカサイ」ポスター（制作：鈴木真歩）

2月23日に「清水みなと散歩 デラックス」が実施された。これは本町付近の市中や、三保半島で同日に多数展開されたイベントの総称で、その一部の運営や出演を常葉大学「ミナトブンカサイ」のメンバーが担い、また、マップデザインも行った（制作：鈴木雅人）。

2014年　前年の企画が雨によって十分に実施できなかったことから、内容はほぼ変えず再挑戦となった。東京大学の大学院生が2人となって、前年までに比べ減少したことから、常葉大学側（代表：此木駿）の役割分担が大きくなった。この年は、公益財団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムの共同連続公開講座「学生の力で地域資源を探して・活かそう！」の第二回として位置付けられ、公開講座とパネル・ディスカッションを屋外ステージで行い、資金も同コンソーシアムから提供を受けた。また、公開講座は常葉大学法学部地域法政策研究・実践センターの共催事業であり、法学部の教員（田中克志教授、柴由花准教授）、学生が全面的に参画した。造形学部は前述の通り企画運営の分担が大きくなったほか、一連の公開講座のフライヤー、ポスターデザインを行った（制作：鈴木真歩）。

2014年10月12日（日）、12：00-19：00に実施され、台風の襲来が予報されていたが、当日は最後まで予定の内容を行うことができ、約400名の来場者を迎えることができた。前年の反省をもとに雨天順延日を設けたが、杞憂に終わったのは幸いであった。なお、翌日は台風のため大学が一部休講になった。

5．2015年の「ミナトブンカサイ」

前年までの実施状況から、特に魅力的な雰囲気を演出できるのは夕方から夜にかけてだと思われたため、日の出埠頭倉庫群の街区での実施は17：30-20：00とすることになった。また、講座やディスカッションは、屋外では聞き取りにくく雨天にも対応できないことから、近隣の別会場で実施することとし、当該街区では、音楽、映像、造形制作等、祝祭的な雰囲気を盛り上げる内容とした。また倉庫群は、この年から土地に加えて建物も鈴与株式会社に所有権が移転し、倉庫としては使われなくなっていた。

この年の資金は、静岡市徳川家康公顕彰四百年記念市民参画事業（家康公事業）および常葉大学地域交流・連携推進事業（地域交流事業）の認定による交付金によって賄った。家康公事業では「駿府の生命線・清水湊と家康公のまちづくり」と題して、駿府に物資を供給した清水湊から駿府までのルートをとらえ、清水市中や北街道沿いに見られる伊豆石の蔵と、当該倉庫群に使われている伊豆石との共通性に着目した。そこで、この話題を中心に語るシンポジウムを清水マリンビル別館（浪漫館）で実施し、その後に日の出埠頭倉庫群の街区で例年通り「ミナトブンカサイ」を行うこととした。「ミナトブンカサイ」費用は家康公事業でその一部を賄ったが、学生の造形作品制作や人的諸費用に関しては地域交流事業の交付金を充当した。地域交流事業に関しては、ここを成果発表の場と想定して、造形学部環境デザインコース3年生の授業、建築設計B,Cの課題を設定した（「公共交通ネットワークとしての自転車、公共施設としてのカフェ」）。授業期間としては4-6月で終了していたが、その作品をブラッシュアップし、図面、模型を展示することで、地域の関係者、来場者に今後のまちづくりについて話題提供を行うとともに、大学教育への意見をいただく場とした。

さらに前年に続き、ふじのくに地域・大学コンソーシアムの共同公開講座「クオリティ・オブ・ライフ　地方で暮らす魅力」の第二回「港の歴史・文化を活かしたまちづくり」を、シンポジウムに先立って同会場で行うこととなった。公開講座は、主催はそれ以後の催しとは異なるものの、内容的、人的には強い関連を持つものである。

実施日は2015年10月18日（日）とし、雨天の場合は屋外での企画は中止することとした。前日から埠頭には大型客船「飛鳥Ⅱ」が接岸することになっていたので、旅客を交えての17日（土）の実施も検討したが、沿道事業者の営業日にあたり、出港後の夜の実施となった。5月から沿道事業者との折衝をはじめ、特に土地、建物の所有者である鈴与株式会社とは、公開の範囲、電源、水道の借用等、打合せを重ねた。日程、内容が確定的になった8月下旬からは、道路占用許可手続きに入り、静岡県知事（清水港管理局）宛の書類を揃えたが、その際には静岡市経済局商工部清水港振興課の全面的な協力を得た。

「ミナトブンカサイ」の内容については、時間帯を夜に絞ったことから、特に暗さを活かした企画を考え、全体のタイトルを「秋の夜の石蔵ギャラリー」とし、新規に発案したのが「私ならこうする清水」（リレートーク）と、「記憶の湊」（映像プロジェクション）である。

「私ならこうする清水」は日の出地区の倉庫群を中心に、清水や三保地区へと拡がるビジョン（スライド）を、倉庫壁面にプロジェクタで映し出しながら提案を行う企画で、公募による4チームがプレゼンテーションを行った後、来場者からの意見や希望も交えながら、近い未来の清水に向けてアイデアを出し、次のステップに向けて語り合った。

「記憶の湊」は昭和戦後期を知る市民のみなさんへのインタビューや、合わせてお借りした昔の写真、清水の風景写真等、港町にまつわる映像を複数のプロジェクタによって倉庫壁面に投影するスライドショー、ビデオ上映である。このインタビューと写真蒐集は8月に東京大学大学院生と常葉大学法学部学生が中心となって行い、これを通して社会学的、近代史的なオーラルヒストリーと映像資料が得られたとともに、地元住民と学生とのまちづくりに関する交流が生まれた。また「記憶の湊」では、清水鉄道遺産保存会の参加を得て、当該街区を走っていた清水港線のかつての映像も上映した。

その他の内容はほぼ前年までの内容を踏襲し、音楽ス

図 15　2015 年「ミナトブンカサイ」シンポジウム会場での課題展示

図 16　2015 年「ミナトブンカサイ」「記憶の湊」上映写真の一例（魚馬蔵）

図 17　2015 年「ミナトブンカサイ」「私ならこうする清水」

図 18　2015 年「ミナトブンカサイ」「アコソコ」と造形作品

図 19　2015 年シンポジウムフライヤー

図 20　2015 年「ミナトブンカサイ」フライヤー

テージでのジャズライブ、「アコソコ」、露店、研究展示、造形作品展示、ライトアップ等であったが、新たな出展者として、静岡農業高校松葉研究班ら三保松原の保全と活用をテーマに活動している団体の参加があった。特に、ジャズライブと「アコソコ」の音楽は、夜ならではの雰囲気のなかで演奏された。これに関連して新たな試みとして特筆すべきは、東海三菱自動車販売株式会社の協力を得て、プラグインハイブリッド車と電気自動車のバッテリーから電源を供給したことである。「ミナトブンカサイ」では第一回目から、電源と水道を倉庫所有者から無償で借用していたが、特に夜間の電源はそれだけでは足りず、レンタルの発電機で供給していた。しかしながら発電機は小型でも音がうるさく、音楽には適切とはいえない状況であった。そこで、近年注目されている自動車用バッテリーから電気を得ることで、音楽や映像に邪魔にならない静かな環境を実現することができた。露店に関しては保健所の指導が厳しく、出店および内容を制限した。

当日は前述のように複数の事業が連続的に行われるハード・スケジュールとなり、また、シンポジウムまでと「ミナトブンカサイ」では会場を別にしたため、設営要員の手配等に苦慮したが、晴天に恵まれ、風もなく穏やかで、夜になっても快適な条件下で実施することができた。来場者数は夜間の屋外であったため把握が困難となったが推定約200名であった。運営に関しては東京大学側が博士課程の大学院生1名のみとなってしまったため、現場はほぼ常葉大学側が担うこととなった。フライヤーデザインは適任の学生がおらず、事業や関係者が複雑になったことから土屋が担当した。当日の一連のスケジュール、登壇者、関係者等を列記すると以下の通りである。

14：30-16：00（関連企画）
公開講座「クオリティ・オブ・ライフ　地方で暮らす魅力」
第二回「港の歴史・文化を活かしたまちづくり」
会場：浪漫館14階（清水マリンビル別館）
主催：静岡県、公益財団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム、常葉大学法学部地域法政策研究・実践センター

- 「清水港の歴史・生活史」 黒瀬武史（後掲）、望月美希（東京大学大学院新領域創成科学研究科）
- 「巴川と北街道：自転車ステーションの設計課題を通して」 伊達剛（後掲）、村井裕（しずおかモビリティ研究会）、常葉大学造形学部環境デザインコース 3 年生
- 「清水湊の遺産とその活用」 杉山智之（後掲）
  コメンテーター： 一ノ瀬彩（後掲）、司会：土屋和男（後掲）

16：00-17：00
シンポジウム「駿府の生命線・清水湊と家康公のまちづくり　まちの記憶と未来」
会場：浪漫館14階（清水マリンビル別館）
主催：地域活性化研究会（家康公四百年祭市民参画事業）
パネリスト：
黒瀬武史（東京大学大学院工学系研究科助教）
伊達　剛（伊達剛建築設計事務所・常葉大学非常勤講師）
杉山智之（杉山智之建築事務所・しみず蔵倶楽部）
一ノ瀬彩（茨城大学工学部都市システム工学科助教）
司会：土屋和男（常葉大学造形学部造形学科准教授）

17：30-20：00
ミナトブンカサイ2015「秋の夜の石蔵ギャラリー」
会場：清水港日の出地区特設会場
主催：地域活性化研究会（家康公四百年祭市民参画事業、常葉大学地域交流・連携推進事業）

- 「私ならこうする清水」プレゼンター：河野季代子（しずおか大人の文化祭）、住吉昴太（第1回三保地域活性化プランコンテスト実行委員会代表）＋町塚俊介（同副代表）、此木駿（工学院大学大学院建築学専攻）、志村真紀（横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）　司会：志村真紀＋一ノ瀬彩
- 「記憶の湊」インタビュー協力者、写真提供者：魚馬、ミナト釣具店、八木善　インタビュアー：望月美希、黒瀬武史、沼倉花菜（大妻女子大学）、柴由花（常葉大学法学部准教授）、岡本拓朗、高橋賢也、大瀧千鶴
- ジャズ演奏：Orange Time（ピアノトリオ）
- アコソコ：杉田裕紀、松永和也、塚本一成、佐々木椋平（アコースティックギター）
- 造形ワークショップ：日高遙菜
- オブジェ制作：長尾隆生、伊東勇樹、中原由希子、藤野真美、菅沼辰朗
- 出店：ハワイ食堂レアレア、常葉大学法学部エリア・デザイン研究会他、三保松葉プロジェクト
- 運営コアスタッフ：鈴木翔大（代表）、光源寺良太、甲賀一哲、岡田茉夏、石間克弥、大村吉輝

（特記なき場合は常葉大学造形学部、法学部学生および有志）
協力沿道事業者：アオキトランス株式会社、株式会社天野回漕店、清水倉庫株式会社、鈴与株式会社、駿河包装株式会社、柏栄トランス株式会社、株式会社富士ロジテック（五十音順）
協力：静岡県清水港管理局、静岡市清水港振興課、東海三菱自動車販売株式会社、フェルケール博物館、沼田酒店、石崎建築設計、みなとふじ

6.「ミナトブンカサイ」を通した環境デザインにおけるPBL

「ミナトブンカサイ」は、東京大学都市デザイン研究室が発端をつくり、回を重ねるに従い、常葉大学造形学部に運営の主体が移行し、2014年からは法学部の一部も加わった。また、地元の協力団体も徐々に広がってきた。ここではこの過程を顧みて、教育的効果と問題点を挙げて

みたい。

当初より、東京大学都市デザイン研究室と常葉大学造形学部環境デザインコースでは、「ミナトブンカサイ」を社会実験として位置付け、賑わい創出のみを目指したイベントとしては考えていない。社会実験としてのこの企画の眼目は、近年中に清水港再編が進むなかで、日の出地区、倉庫群の将来の使われ方のビジョンを提示することであった。倉庫群の保全のもとで、それを活用し、まちづくりのある種の核となることを目指すという背景がある。そのための賑わい創出であり、当該街区を一般の人々が集い、歩くとどのような光景が生まれるか、という実験であった。

基幹にあるのは、80年近くを経た倉庫群という歴史的建造物であり、それが都市的スケールで集積し、さらに立地している土地までもが土木的に建設されたという物的存在と、それが遺産的価値をもちうるという認識である。そして、その建築、景観への興味、関心を、学生も教員も共有していることが前提となっている。この独特の景観を、多くの人に見てもらいたいという気持ち、換言すれば、これを発見した自賛のような感覚が運営側にはあり、これは大切にしておきたいと思っている。こうした建築、景観に対する関心は、通常の教室での教育が、実地の経験と結びつくところから生まれると考えられる。

社会実験という位置付けは、利益や集客を第一義としない自主企画であり、資金的、人的にも特定の企業や団体から依頼されるのではなく、自主的に獲得、調達するという方法で進めてきた。そうした意味ではきわめて研究的、教育的な方法である。東京大学都市デザイン研究室は、国内外各地で多数のまちづくりプロジェクトを進めており、社会実験についても一定の知見とノウハウがある。これを活かして「ミナトブンカサイ」がスタートしたことには大きな意味があり、この方向性のもとで、常葉大学造形学部が実地を通して学んだ教育的効果は多大である。特に東京大学の大学院生と常葉大学の学生がミーティングを重ねるなかから、教え、学んだ体験は、教員による教室での教育とは明らかに異なる効果があったと考えられる。いわばプロジェクト力の伝道とでもいえようか。

また、この企画を教育の発表機会ととらえることで、文献調査やヒアリングが行われ、歴史的環境形成への資料収集が進んだ面もある。2015年には、これに向けて常葉大学内の授業課題を組むという試みも行った。他方、この企画の運営そのものはカリキュラム外で学生の自発的参加という形で進行した。その内容は、環境デザイン関連分野の職業に引きつけてみれば、図面（配置図等）を作成し、スケジュール管理（工程表）を行い、関係企業や行政機関との事前協議を行うといった、建築設計事務所や建設会社の業務のシミュレーションともいえる。そして企画の実現に向けて、多くの社会人やまちづくり関係者と出会い、交流ができるという体験は、学生にとっては教室では得がたいつながりである。したがって、この企画を進行することが、授業内外ともに実践的な環境デザイン教育であり、ある種のPBLとして機能していたといってよいだろう。

一方、問題点も多々ある。一般に教室外でのプロジェクトにおいては、時間、資金、人的要因の不確定要素が教室内に比べ格段に多い。学事歴、カリキュラム、そしてシラバスとの整合性をとることが難しく、そこから導き出されてくる年度単位の予算、時間割等とも整合しにくい。「ミナトブンカサイ」の企画運営を、学部教育においてはカリキュラム外で行わざるを得ない最大の理由はこれらにある。また、学生のスケジュール管理、リスクマネジメント（事故対応、保険）に関しては、これまでは事なきを得ているものの懸念は残る。さらに、自主企画であることの宿命とはいえ、毎年資金源が定まらず不安定な費用捻出が続いている。こうした問題の解決のためには、授業運営の枠組み、予算とその執行の方法など、大学における組織的な取り組みが、事務的な柔軟性、即応性を含め必要と思われる。また、学生、大学院生の年度による人数、取り組み姿勢のばらつきも不安定要因であり、この経験を通して大きく成長する学生もいれば、事務的な制約等で学生指導に手が回らず不十分な結果に終わる部分もあった。

4年間続け、いわば卒業年度を迎えた「ミナトブンカサイ」であるが、今後のことについては未定である。会場としてきた倉庫群の将来が未定と聞くし、上記のような問題からも現状では継続的な開催は確約がない。立地条件と現在の機運から考えれば、客船の寄港に合わせる等の取り組みが期待されるが、その実現には大学が主体となった自主企画の枠組みを超えたしくみが必要かもしれない。これまで「ミナトブンカサイ」では、学生と教員が興味と関心を共有できる場所で、面白いと思うことを行ってきた。このことは前述の通り、PBLの原点ともいうべきことであり、教育・研究として考える以上、外すことのないようにしたいと考えている。

謝辞：文中に記した、沿道事業者、協力企業、団体、行政、大学関係者の方々をはじめ、ここに記すことができなかった多くの方々にお世話になりました。深く感謝申し上げます。

参考文献：

東京大学大学院工学研究科都市工学専攻都市デザイン研究室「平成23年度清水港日の出地区周辺のまちづくりに関する調査研究報告書」静岡市都市局都市計画部都市計画課、2012
大森文彦、黒瀬武史「清水港における港湾成立の歴史と歴史的資産に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画）』pp.753-754、2012
萩原拓也、黒瀬武史他「清水港日の出地区とその後背地域の戦後における変遷」『日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画）』pp.745-746、2013
「日の出埠頭倉庫群実測調査報告書」東京大学都市デザイン研究室、常葉大学造形学部、しみず蔵倶楽部、2013
大森文彦、黒瀬武史「遊休内港地区の漸進的再生に関する研究　顕著な歴史的価値を有さない港湾施設を活用した事例を対象として」『日本建築学会計画系論文集』79（697）、pp.701-709、2014